

言語習得の側面から捉えた Information Transfer 授業の実践 —初中級におけるノートテイキング準備のカリキュラムの一提案—

発表者：黒崎亜美、黒崎誠（ラボ日本語教育研修所）

1. はじめに

昨年、今大会でノートテイキングの長期的な授業計画を提案し、ノートテイキングは技能習得だけでなく言語習得側面からも有効であることを示した（黒崎・黒崎 2015）。しかしノートテイキングは、急に習得できる技能ではなく、その技能を習得するための準備が十分に必要であると考え、本発表では、ノートテイキング授業以前の、初級及び中級前期では、どのような技能を習得することで、ノートテイキングへ結びつくのかを読解、ディクテーションの授業の2つから提案したい。

2. 先行研究

Nation & Newton(2009)は、第二言語習得において音声情報を文字情報に転換すること（Information Transfer）が非常に重要であり、ノートという新たな形にまとめなおす活動を言語習得の有効な手段として提案している。大手山・黒崎（2010）は中級レベルでのノートテイキングの授業を報告し、ノートの完成度には聴解力だけでなく読解力も影響している可能性があることを指摘している。一方、門田（2002）は、いくつかの先行研究をまとめたうえで、内容スキーマとともに形式スキーマの活性化も読解において重要な要素であると述べている。

3. 実践報告

3.1. 読解の授業

3.1.1. 授業の概要

本機関の中級前期クラスでは、読解は、技能、機能を項目立てたオリジナルテキストを用いている。学習時間は800～1000時間であり、初級終了直後のクラスである。

この授業は、読解の授業であり、その目的は、説明文が読めるようになることである。学習者は、速読に関する基本的な技能を体験しつつ、様々な機能を持つ説明文を読む練習をする（表1）。

表1 ラボ日本語教育研修所『中級前期 読解 教科書』 内容

各課タイトル	扱う技能	文章の持つ機能
第1課『案内』	情報を探す	事物の紹介
第2課『事故』	大意をつかむ	5W1H
第3課『観光』	キーワードを探す	特徴の説明
第4課『比較』	話題を考える	比較の説明
第5課『由来』	主題を考える	原因・理由の説明
第6課『歴史』	図を利用する	変化の説明
第7課『疑問』	段落の役割を知る①	実証分析文（仮定）
第8課『実験』	段落の役割を知る②	実証分析文（検証）

このレベルでの読解では、次のような手順で進める。

- ① 「速読」のさまざまな技能を気づく、基本練習
- ② ①を活かし、文章の内容を捉え、文章の情報を整理する「文章整理」
- ③ ①と②を活かし、複数段落から形成された説明文の「精読」を行う。

3.1.2. ノートテイキングとの結びつき

ノートテイキングは「メモ・ノート」の授業だけで完成するわけではない。学習者は、情報をインプットした後、その情報を、機能に適した「型」にあわせてまとめる必要が生じる。ノートの「型」を理解するためには、その談話がもつ機能を意識できることが前提である。そのために、談話の機能に注目させる読解も、ノートテイキングのスキルを習得するためには重要なファクターである。

読解の授業で行う「文章整理」では、文章の機能ごとにまとめ方を変えており、その文章整理がノートテイキングに直結する。たとえば、「比較」では表の形にまとめる。「特徴」では、「～について」のように話題を見つける。学習者は、ノートテイキングの授業以前に、読解の授業の中で、説明文の特徴、談話の型を、視覚的に学習する。その後、これらを用いてノートテイキングを行っていく。

3.2. ディクテーション

3.2.1. 授業の概要

本機関では、初級前期から中級後期までという、かなり長い期間（学習時間 0～1000 時間）にわたり、ディクテーションのトレーニングを継続的に行っている。ノートテイキングの授業を開始するのが中級中期後半からなので、それ以前のレベルで、ディクテーションを行う形となる（表 2）。

表2 ラボ日本語教育研修所 「ディクテーション授業」の流れ

レベル	学習時間	ディクテーションの授業
初級	0～400 時間	初級文型を含む一文を、正確にディクテーション
中級前期	401～800 時間	ニュース内のキーワードなどをディクテーション
中級中期・後期	801～1000 時間	●情報番組のキーワードなどをディクテーション ●収集した情報を形式を変換し、正確に書く

初級では、教師による音読で一文をディクテーションするトレーニングを行う。中級では、単語、

一文、談話の中での重要

語のディクテーションをトレーニングとして行う。

ディクテーションの目的は、音声情報を正確に文字化できるというものであり、ノートテイキングにおいては、必要不可欠な技能と言える。目標はそのレベルにより違う。

初級では、一文を正確に聞き取ることに目標をおく。しかし、中級では、最終的に、取得した音声情報を、適切な形に変換し、適切な個所に書き込める事までが目標とされる。

ディクテーションの最終到達と考える中級の「聞く+書く」の授業では、情報番組などから、必要とされる音声の情報を正確に聞き取り、体言止め、箇条書き、辞書形止めなどの形式に変換し、その情報を求められる箇所に書き込むという授業を行っている。

3.2.2. ノートテイキングとの結びつき

ノートテイキングでは、二つの大きな能力が求められる。一つは音声からの情報を収集

する能力であり、次にその収集した情報を整理する能力である。これらを実現させるのがディクテーションの能力である。

ディクテーションで正確に音声情報を文字化できれば、後から辞書を用いて、漢字・カタカナに変換することができる。また、聞いた情報をラベリング、グルーピングすることができれば、情報を整理することができる。

しかし、ディクテーションは、短期間で習得できる技能ではなく、長い時間をかけ、トレーニングし、徐々に生活語彙から学習語彙へ移行し、内容の難易度を上げていくことが求められる。

4. 初級から中級前期にかけてのカリキュラムの提案

4.1. 情報収集能力

ディクテーションにより、情報を収集するためには、いくつかのステップが必要だろう。音声情報を正確に文字化できる、文字化した情報の意味を正確に認知できる、談話の中の重要な語彙のみを拾い出せる、などの技能が考えられる。

当然、これらすべてを短期間に習得するのは難しい。そこで、ディクテーションは、長い期間、トレーニングとして続けることが重要ではないか。

また、難易度は、使用される語彙によっても変化する。初級では身近な語彙、生活語彙が中心であるが、中級になれば学習語彙が多く登場する談話でのトレーニングが求められる。アカデミック・ジャパニーズとして、「講義を聞く」ということを最終到達点として考える場合、専門用語を含む談話でのトレーニングも必要となる。

4.2. 情報整理能力

ディクテーションで情報を収集するだけでは、将来的にノートテイキングに結びつくことは難しい。そこで、ディクテーションをしながら、収集した情報が、全体の中でどのような位置づけになるのかを理解することも重要である。また、情報を箇条書き、体言止めなどの形式で並べること、情報のグルーピング・ラベリングをすること、話題などのキーワードを見つけ出すことなども求められる。

4.3. 談話の型の知識

ディクテーションで音声情報を収集したとしても、それを並べればノートになるものではない。談話の型を視覚的に学び、それを音声情報と合致し認知することが必要となる。文章の談話の特徴を項目立て・図・表・矢印などの記号などを用いて、効果的に可視化することも並行して求められる。

5. まとめ・今後の課題

ノートテイキングという活動は、技能習得だけでなく言語習得の側面からみても有効であることを昨年の今大会での報告で示した（黒崎・黒崎 2015）。その結果を前提として、今回は技能習得の側面に焦点を当て、ノートテイキング授業以前の初級から中級前期にかけてのカリキュラムを提案した。その際に重要であると考えたのは、「情報収集能力」「情

報整理能力」「談話の型の知識」の3点である。

すなわち、音声情報を正確に文字化し、その情報を認知できる能力、収集した情報を整理する能力、収集して整理した情報を談話の持つ形式に合わせて可視化する能力、これらが身について初めて誰がみても理解できる、いわゆる良いノートを作成することができる。そして、この能力が身につくように工夫した活動をレベルに合わせた内容でトレーニングとして行えば、それが言語習得に直接的に結びつく有効なカリキュラムになるはずである。

今後の課題は、研究面では授業の効果について縦断的調査を行うことであり、実践面では各種の技能を習得できるようカリキュラムを整備することである。そして、その際に注意しなければならないのは、技能を紹介するだけでは習得に繋がらないということである。つまり、技能の習得には一定の期間その技能の習得を目指した練習を継続して行わなければならないのである。

例えば、「談話の型の知識」でいえば、文書の談話から得た型を理解しただけではノートテイキングで有効に使用することはできない。今回示した中級前期までのカリキュラムでは、「談話の型の知識」を提示する（知識として学生に示す）ことが主となる。それに続く中級中期以上のレベルでは、読解および聴解の授業において、取り扱う談話がどの型に当たるのかを正しく指摘する活動を継続的に行うことが重要である。学習者はそれを経て初めてノートテイキングにおいて適切な談話の型を適切な時機に想起できるようになるだろう。また同様に、ディクテーションの技能は一朝一夕で習得することはできない。ある期間、ディクテーションをトレーニングとして継続する必要があるだろう。継続されたトレーニングの末に技能習得が期待できる。

このように、技能習得を目指した継続的なトレーニングを積極的、かつ継続的にカリキュラムに取り入れることを今後の課題とする。そして、このトレーニングの必要性を学習者と教師が共有することでさらに効果が上がるを考える。

【参考文献】

- Nation, I. S. P. & Newton J. (2009) *Teaching ESL/EFL listening and speaking*. Routledge, Taylor & Francis.
- 大手山藍衣子・黒崎亜美 (2010) 「中級レベルにおけるノートテイキングの授業」『日本語学校教育研究大会予稿集』
- 門田修平 (2002) 『英語の書きことばと話すことばはいかに関係しているか 一第二言語理解の認知メカニズムー』 くろしお出版
- 黒崎亜美・黒崎誠 (2015) 「アカデミックジャパニーズ習得を目指すノートテイキング授業の実践—初級から上級にいたるまでのカリキュラムの一提案—」『日本語学校教育研究大会予稿集』
- 田中真寿美 (2008) 「新聞の人物欄を用いた発表およびレジュメ作成の試み」『日本語教育方法研究会誌』 vol. 15, 20-21